

無線機配備コミュニティの一つ、ラムブソンを訪ねて

国際ボランティア貯金寄附金配分事業出張報告

ゼネラルサントス空港に着いた12月11日、さっそくラムブソンへ行ってきました。ふもとの町クロッドまでは車で、そこからは急勾配の斜面を徒歩で登っていきます。今更ながら、何故ビラーンの人たちがこのような場所に居住しなければならないのか考えてしまいます。同行してくれたビラーンの小学生の女子(写真左下)にとってもこの斜面はきついようで、運動不足の私よりも遅れがちになり、たびたび小休憩をとります。しかし農民はそんな斜面で馬を操って耕し、コーンの畑を作っていました。

滝木の林を抜けて約1時間後、ラムブソンの村に着きます。話に聞いていたとおり、山の尾根を開拓した村なので奥へ長く続いています。このように他の村から孤立し、なおかつ標的になってしまうような場所では、心細さもひとしおでしょう。また、急病人などのアクシデントがあったときはどうしていたのでしょうか。

このラムブソンにも、10月には無線が設置され、ゼネラルサントスのCMB本部と随時連絡がとれるようになりました。住民に感想を聞いてみると、「とても助けになります」「コミュニケーションが早くできる」「病人が出た時、指示を受けて適切に薬を与えることができる」とコメントしてくれました。

このような場所でも、1年から6年までの小学生128名が、放課後の校庭で楽しく遊んでいました。また校庭のすみに設置してある屋根の水を集めた天水タンクと、家の間を往復して水汲みをする子どももいます。

コープ(住民組合)スタッフの話も聞きました。発足後2年半経過して、今コープ加入世帯は48世帯となり、運営は順調にしているとの報告でした。それでもまだまだ住民の平均年収は3000ペソ(約7500円)です。現金収入の多さが即豊かさの指標ではありませんが、今後のこの村の未来を共に考えてくださることを皆様をお願いします。
(事務局プロジェクト担当:佐々木真紀子)

 <p>伝統衣装マロンは荷物運びに便利(ラムブソンに帰る6年生)</p>	<p><CMB プロジェクトチーム> 代表: リッキー (写真右:通信担当) 副代表: ジョジョ (医療担当) 書記: ノーマ (教育担当) 会計: カティ (財務担当) 会計監査: ディダン (アトゥモロック担当) 顧問: ジェームズ神父 (地区担当はその他サムラングのロニーなど4名)</p>	
--	--	--

— 懸案のCMBプロジェクトチーム発足 —

昨年11月に、ジェームズ神父が新ディレクターに決まったとの報告を受けた時、まず、最初に気になったのは、研修のためアメリカ滞在中のデオ神父の事です。7月末の現地訪問中、渡米前の神父と今後の事業について打ち合わせした時は、帰国後のCMBの任務継続に対してやる気満々でしたから、就任後2年3ヶ月でのディレクター解任、マニラ転任命令には、神父自身が一番驚いたはずでした。

このようなディレクターの短期交代、しかも、前任者はその後一切CMB活動に関知しないことによる弊害は、住民組合育成など、事業の継続的管理が重要な分野にすでに表れていて、会としても、スタッフの長期現地派遣などの対応を検討してきました。この現地駐在員を配置する案には、会員の相田さんが協力を申し出て下さったのですが、ミンダナオの治安悪化で当分実現は難しくなりました。

代替案として考えていたのはCMBスタッフによるプロジェクトチームの設立です。たとえトップの神父が交代しても、実務を担当する常設のスタッフチームが支援事業に責任を持つならば、事業の継続に支障は出ません。今回の突然のディレクター交代は、新構想実現のまたとないチャンスでした。12月の現地出張でも、新チーム発足の必要性をCMBの神父やスタッフに強く訴えて理解を求めました。

1月に入って受け取ったプロジェクトチーム案は、こちらが希望したように、事業の事前調査、企画、実施計画書作成、事業の実施と継続的管理、報告書作成などの任務がしっかり盛り込まれていました。

1月19日に正式に発足したチームの役員は上記(写真枠内)のように、今までも私たちが関わってきたCMB本部や地域の担当者ですが、これまでと異なり、実務に関する限りは、その都度神父の指示や許可を受ける必要がなく、私たちの実質的現地パートナーとして、先住民族の課題をともに考え、問題解決に力を発揮してくれるものと期待しています。